

日本語の主格目的語に見られる作用域の不一致に関する一考察*

中野晃希 (大阪大学大学院)

要旨

日本語の可能接尾辞を伴った文では目的語が主格と対格のどちらであっても生起可能であり、主格目的語であれば可能接尾辞を超える広い作用域を取ることが出来、対格目的語では可能接尾辞を越えない狭い作用域しか取ることが出来ず、その特徴的な作用域に関する分析が多くなされてきた。Takahashi (2010) では顕在的には同じ位置に生起する主格目的語も対格目的語も、数量詞繰り上げによって異なった位置での解釈が行われていると分析した。Kasai (2018) では Scrambling によって移動しているかしていないかを格付与の観点から議論している。本発表ではその二つの分析を取り上げ、まず Scrambling による分析では NO が広い作用域を取れるにもかかわらず AO が狭い作用域しか取れない点に関して Chomsky (2001) によるフェイズ不可侵条件を用いた二重(二回移動)構造で分析する必要があると指摘し、次にその移動が非顕在的な移動でなく顕在的な移動であることを示すデータを取り上げ議論する。主格目的語に限り多義性を有し対格目的語では曖昧性が生じないことから、本発表では主格目的語の移動分析、ひいてはその顕在的な移動分析を支持する。

1. はじめに

日本語の可能接尾辞「られ」を伴っている文では、(1) のように目的語に「を」だけでなく「が」が付与されることも出来ると Kuno (1973) で観察されている。

- (1) a. 私は英語 {が/を} 話せる
b. 太郎が小指 {が/を} 曲げられる

「が」が付与された主格目的語 (Nominative Object; NO) と「を」が付与された対格目的語 (Accusative Object; AO) では作用域が一致しないことが指摘されている。NO であれば (2a) のように可能接尾辞「られ」を超える広い作用域を取ることが出来、AO であれば (2b) のように狭い作用域しかとることが出来ない。それぞれ (2) の広い作用域と狭い作用域の解釈が (3a)、(3b) である (cf. Tada 1992, Koizumi 1998, Saito and Hoshi 1998, Takahashi 2010, Takano 2003)。

- (2) a. 太郎が小指だけが曲げられる [only>can, (?can>only]
b. 太郎は小指だけを曲げられる [?*only>can, can>only]
(cf. 小指だけ₁を 太郎は t₁ 曲げられる [only>can, can>only])

* 本発表に関して、浅野真菜氏、井原駿氏、大谷修樹氏、越智正男氏、平山裕人氏、水谷謙太氏、宮本陽一氏、また阪大神大言語学勉強会の皆さま、LCCC (Language, Computer, and Communication Circle) の皆さまから内容や例文に関して多くの有益なコメントをいただきました。この場で深く感謝を申し上げます。当然ではありますが、本発表の内容や例文に関する不備はすべて筆者によるものです。

- (3) a. Wide Scope (WS) : only>can
 “(他の指は曲げることが出来ず、)唯一小指だけ曲げることが出来る”
 b. Narrow Scope (NS) : can>only
 “(他の指は曲げられても曲げられなくてもよく、)小指単体を曲げる能力がある”

その中でも NO は WS を取りやすい反面、(4)のように可能接尾辞「られ」よりも狭い NS を取りうるものが Nomura (2005) により分析されている。以下の発話は一定の解釈で容認可能な適格文である (cf. Takahashi 2010)。

- (4) a. 太郎が小指だけが曲げられるのは知っていたが、(彼が) 薬指だけでも曲げられるのには驚いた。
 [*only>can, can>only]
 b. ジョンは右目だけがつむれさえた [*only>can, can>only]
 “(左目はつむれないが、)唯一右目だけつむれる” *only>can
 “(左目はつむれてもつむれなくてもよく、)右目でウインクできる” can>only

さらに (5) のように NO は否定辞「ない」より広いスコープを取ることも観察されている (cf. Koizumi 1998, Nomura 2005, Takano 2003)。

- (5) a. 太郎が小指だけが曲げられない [only>not>can, (?not>can>only]
 “(他の指は曲げることが出来、)唯一小指だけ曲げられない” WS (only>not>can)
 “(他の指は曲げられても曲げられなくてもよく、)小指単体を曲げる能力がない” NS (not>can>only)
 b. 太郎が小指だけを曲げられない [?*only>not>can, not>can>only]

Takano (2003) では NO の作用域に関して (6) のような文においても分析が行われており、(2) とは違い NO が NS を取るが出来ないとされた。

- (6) a. 太郎は小指だけが曲げることが出来る [only>can, *can>only]
 b. 太郎は小指だけを曲げることが出来る [?*only>can, can>only]

本発表では (2) の分析を行う為以下から共に Nomura (2005) の分析 (cf. (4)) を採用した、Takahashi (2010) による「数量詞繰り上げ (Quantifier Raising; QR)」を用いた (2) の分析と、Kasai (2018) による「かき混ぜ操作 (Scrambling)」を用いた (6) に関する分析の二つを概観する。その後①NOの作用域が (2a) のように作用域を任意に変えられる中、AOの作用域が (2b) のように一つの作用域しか許さないことを説明するために「二重 (二回移動) 構造」の必要性を指摘した後、②QRではなく Scrambling による NO の移動を支持するデータを分析する。

2. 先行研究

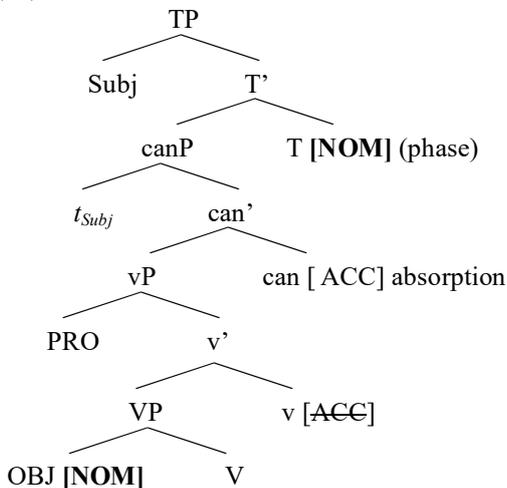
2.1 QR-分析 (Takahashi 2010)

(2) に見られる NO と AO の作用域の差を Takahashi (2010) では QR によって説明した。まず、QR が節境界に縛られていることを示す (7) (‘clause-bounded’: May 1977) は(8) のフェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition; PIC : Chomsky 2000) に帰着するという仮定 (9a) を採用した。Takahashi (2010) では “edge” = “specifier and adjunct to a phase head” としている。その上で「だけ (only)」の QR に関して (9b) のように提案した (Takahashi 2010)。

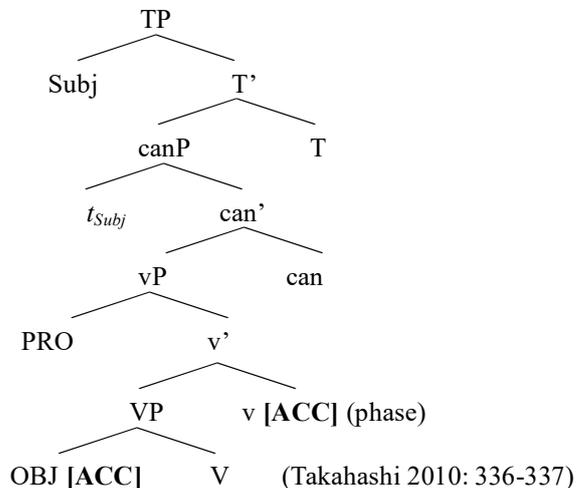
- (7) a. Someone loves everyone [some>every, every>some]
 b. Someone thinks that John loves everyone [some>every, *every,>some]
- (8) In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.
- (9) a. The domain of QR of *dake* is phase-bound.
 b. Case-valuation determines phasehood.

つまり、vP は格付与を行った時に限ってフェイズとなりうる。この仮定を基に (2a), (2b) をそれぞれ (10a), (10b) のように分析している。

- (10) a. 太郎が小指だけが曲げられる



- b. 太郎が小指だけを曲げられる



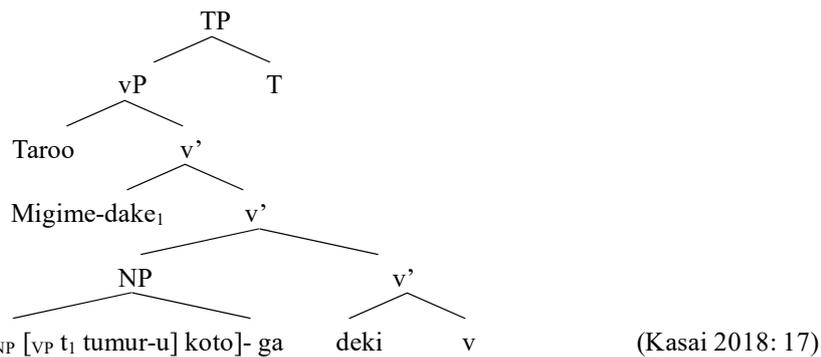
まず可能接尾辞が任意に v の格素性を吸収 (absorb) すると仮定した。(10a) では対格 (ACC) が吸収されており、そのため NO は T によって主格 (NOM) を与えられている。(10b) では対格が吸収されないため AO は v によって対格を与えられている。この時 (9b) から、格を与えた節点がフェイズとなるため (10a) では T が、(10b) では v がフェイズの主要部となる。このフェイズの位置の差によって NO と AO の作用域の差が生じている。つまり、フェイズが TP である NO では可能接尾辞 “can” を越えている TP へでも、越えていない vP へでも QR することが出来るが (cf. (10a))、フェイズが vP である AO ではその指定部

(spec-vP) への QR のみしか出来ず、可能接尾辞を越えることが出来ない (cf. (9a))。Takahashi (2010)ではフェイズの位置をずらすことによってその後の QR 可能性から NO と AO の作用域を説明している。

2.2 Scrambling-分析 (Kasai 2018)

Kasai (2018) では、(6) に見られる NO と AO の差を scrambling によって説明し、その後 (2) の Scrambling での説明も試みている。まず Kasai (2018) の取り入れた大きな仮定として Zushi (2016) でまとめられた構造的位置によって格付与がなされるという (11) と、(8)を調整した Chomsky (2001)による PIC (12) がある。(12) において、H はフェイズ主要部、ZP は H より一つ上のフェイズを意味する。Kasai (2018) はこれら仮定を用いて (13) のように分析している。^{1, 2}

- (11) a. When a nominal is merged with a lexical head, its Case feature is valued as accusative.
 b. When a nominal is merged with a phase head (v or n), its Case feature is valued as nominative or genitive.
 c. Otherwise, the Case feature of a nominal is valued as dative.
- (12) The domain of H is not accessible to operation at ZP; only H and its edge are accessible to such operation.
- (13) 太郎は右目だけがつむることが出来る [only>can, (?)can>only]³



- (14) [TP [VP John [v' migime-dake1 [v' [VP t1 tumur] [v' e v]]]] T] (Kasai 2018: 29)

まず Zushi (2016) による状態述語 (stative predicate) の分析を採用し、「出来」がフェイズ主要部とともに補部位置でなくその縁部 (edge) に主題 (Theme) の意味役割をもつ項を取ると仮定する。つまり、(11) の格付与は主要部 (head) との併合 (merge) ではなく縁部 (edge) への移動によって行われるとした。(13) は NO の場合で、主格を得るためにフェイズの縁部へとスクランブリングしている。AO であれば「こと」句内の動詞から対格を得るため移動せずに基底位置に留まる。この分析によれば (6) と (13) で NO は移動し「出来」を越えることが可能、NS しか取れない AO は生成位置で対格をもらうため移動できず「出来」を超えられない。また、NO は移動をしているため元位置のコピー (lower copy) の存在により NS 解釈が可能になる。この時格付与 (valuation) 操作は自由に適用可能であると仮定しているため、基底位置で対格を

¹ 本稿では詳しく扱わないが、 ϕ 素性の一致が見られない言語では格付与が minimalist program の中でなされているような一致の副産物 (Chomsky 2000) としてではない可能性が議論されている。

² 節点 vP が無いこと (Negative concord Item による説明) も含め、「こと」句に関する分析の詳細は Kasai (2018) で行われている。

³ Kasai (2018) は Takano (2003) とは異なり、NO が (6) でも NS も取るという容認性を採用した。

与えられないまま vP の縁部へと移動して主格を与えられることが出来る。Kasai (2018) はこの分析 (13) をそのまま (2) の分析にも当てはめている。「出来」と同じ位置に可能接尾辞「られ」が入り「こと」句の位置に動詞句が入る (14) がその構造である。Kasai (2018) では Scrambling と構造的位置による格付与によって NO と AO の差を説明した。

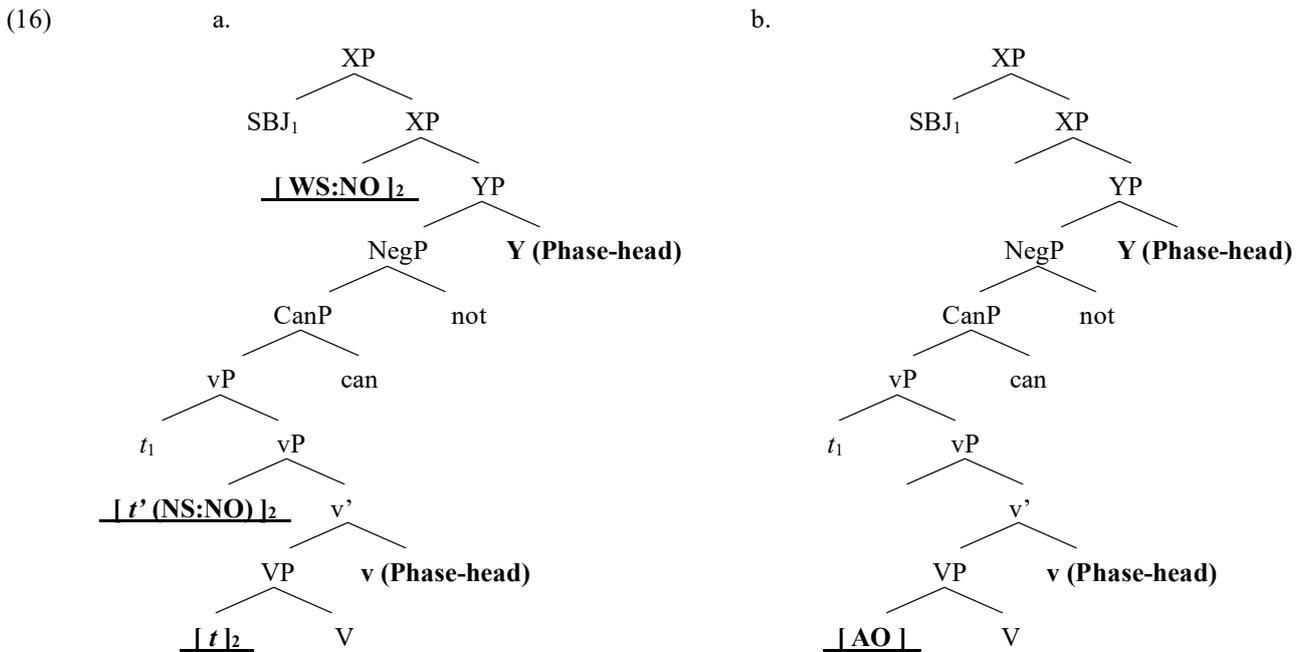
3. 主格目的語の構造と移動について

3.1 二重 (二回移動) 構造

Kasai (2018) は分析 (13) と (14) の問題点の指摘も行っている。(5) を再掲した (15) では NO (only) が、否定辞「ない(not)」よりも広い作用域を取ることが出来る。(14) では WS をとる NO は格の認可の為 vP の縁部へと移動しているため、vP より上に merge される否定辞よりも下へと移動していることになってしまう。そこで vP 位置への移動後さらに移動 (scrambling) することにより否定辞よりも広い作用域を取れるとした。しかし、NO が scrambling を何度でもできるのなら AO も WS を取れる位置に移動できることになってしまうため、AO の WS 解釈が取れないことは例外であるとした。

- (15) a. 太郎が小指だけが曲げられない [only>not>can, (?)not>can>only]
 b. 太郎が小指だけを曲げられない [?*only>not>can, not>can>only]

この否定辞も含めた作用域を Scrambling 分析を用いて例外ではなく説明するためには以下の二重 (二回移動) 構造が必要である。



(16a) は NO の例であり、vP の縁部へと移動しそこで主格を得て NS を取る。さらにその後次のフェイズ主要部よりも上へと移動することで否定辞も越えた WS を取る。(16b) の AO の時は対格を得るために基底位置に留まり、(12) によってフェイズ YP を超えることが出来ず、WS 解釈が取れない。NO での移動はすべて Scrambling によって行われており、主格を得ている最初の vP への移動と Scope が入れ変わるフェイズ主要部 Y より上への移動がある。この二回の移動を必要とする、つまり着点を二か所必要とする二重構造を仮定することで、NO の曖昧性と AO の一義性を捉えられる。ここでは Kasai (2018) と同様に格付与が自由に適用されるため対格を与えられずに移動してその後主格を得ることが出来る。

3.2 移動

Funakoshi and Takahashi (2014) では、NO でありながら NS 解釈のみしかとることが出来ない (17) を (18) に見られる介入効果 (LF-intervention Effect) によって説明することで NO の非顕在的移動を支持している。

- (17) a. 誰も右目だけがつむれない [?*only>can]
 b. [右目だけが]_i 誰も t_i つむれない [only>can]
- (18) a. ?*誰も何を買わなかったの?
 b. [何を]_i 誰も t_i 買わなかったの?

(18a) のように否定極性項目 (NPI) 「誰も」が WH 句を構成素統御している時文法性は下がる。この現象が介入効果と呼ばれ、(18b) のように顕在的な移動は許すが、非顕在的な移動を阻害する。Funakoshi and Takahashi (2014) は、(17a) では NO が WS を取れていない中、顕在的に目的語を移動させた (17b) では WS を取れることから介入効果が働いており NO が非顕在的に移動しているとした。しかし次の (17) と同じ NO でありながら WS を取れない (19a) と (20) は介入効果で説明することが出来ない。

- (19) a. 太郎が上手に小指だけが曲げられる [*only>can]
 b. 太郎が小指だけが上手に曲げられる [only>can] (Ochi and Saruwatari 2014)
- (20) 太郎は {全く/少しも/完全に} 小指だけが曲げられない [?*only>can]
- (21) a. 上手に何を買えなかったの?
 b. (?)全く何を買わなかったの?
- (22) a. #小指だけが曲げられることが上手である [well>can]
 b. #小指だけが曲げられないことが上手である [well>can] (cf. 上手に小指だけが曲げられない)

(21) のように介入効果を示さず介在して文法的となる副詞であっても (19a), (20) のように作用域に関しのみ WS を取ることが出来ず、さらに (19b) のように顕在的な移動で WS 解釈が可能になる。つまり、介入効果による説明では NO が狭い作用域のみ可能な場合を説明することは出来ない。しかし Scrambling 分析では簡単に説明が可能である。(17), (20) に見られる NPI であれば「ない」に同一節内で束縛されていなければならないという NPI の性質によって (16) の NegP 以下に副詞があり、その下に NO があるため NS しか取れない。(19), (20) に見られる様態副詞 (Manner adverb) であれば (22) のような副詞が可能接尾

辞を越えて掛かる解釈は矛盾しているため可能接尾辞以下に様態副詞があり、その下に NO があると分析できる。QR 分析ではどこに副詞があろうと T がフェイズとなり WS を取れると誤って分析してしまう。語順を変えた (19b) が WS を取れることも (2b) のように Scrambling で移動していると説明できる。

4. おわりに

本発表では①NO が WS 解釈を取れ AO が WS を取ることが出来ないことを説明するために二重構造を提案し、②NO の移動は QR 分析ではなく Scrambling 分析の方が妥当であることを NO が WS を取ることが出来ないデータで示した。しかし、なぜ “only” を使用した時のみこのような作用域のばらつきが見られるのかを否定辞や数量詞と比較検討する必要がある。また、本当に日本語のような ϕ 素性の一致が見られない言語では構造的な位置から格付与がなされているのか、なぜ (2b) のような目に見える AO の移動は可能なのか、NO の取る構造に関しても広い作用域を取るための移動の着点はどこにあるのか、多くの疑問がまだ残っている。本発表では Scrambling 分析において NO と AO の差別化に必要なフェイズ不可侵条件を用いた構造の導入と、移動の元位置 (tail) でなく着点での顕現を支持するデータの分析を目的とした。

5. 参考文献

- Chomsky, Noam.** 2000. Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels & Juan Uriagereka (eds.), *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press. / **Chomsky, Noam.** 2001. Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A life in language*, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press. / **Funakoshi, Kenshi and Takahashi, Masahiko.** 2014. LF Intervention Effects and Nominative Objects in Japanese. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*: Vol. 20 : Iss. 1 , Article 12. / **Kasai, Hironobu.** 2018. Case valuation after scrambling: Nominative objects in Japanese. *Glossa: a journal of general linguistics* 3(1): 127. 1–29, DOI: <https://doi.org/10.5334/gjgl.676>. / **Koizumi, Masatoshi.** 1994. Nominative objects: The role of TP in Japanese. In Masatoshi Koizumi & Hiroyuki Ura (eds.), *Proceedings of the first formal approaches to Japanese linguistics (FAJL 1)*, 211–230. Cambridge, MA: MITWPL. / **Koizumi, Masatoshi.** 1998. Remarks on nominative objects. *Journal of Japanese Linguistics* 16. / **Kuno, Susumu.** 1973. *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass. / **May, Robert.** 1977. *The grammar of quantification*. Ph.D. diss., MIT. / **Nomura, Masashi.** 2005a. *Nominative Case and AGREE(ment)*. Ph.D. diss., University of Connecticut. / **Ochi, Masao and Saruwatari, Asuka.** 2014. *Nominative objects in Japanese and covert/overt movement*. Poster presentation at FAJL7, June 27, 2014. / **Saito, Mamoru, and Hiroto Hoshi.** 1998. Control in complex predicates. In *Report of the special research project for the typological investigation of language and cultures of the east and west 1998 II*, 15–45. University of Tsukuba. / **Tada, Hiroaki.** 1992. Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14, 91–108. / **Takahashi, Masahiko.** 2010. Case, phases, and nominative/accusative conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 19, 319–355. / **Takano, Yuji.** 2003. Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language and Linguistic Theory* 21, 779–834. / **Zushi, Mihoko.** 2016. Case and predicate-argument relations. In Koji Fujita & Cedric Boeckx (eds.), *Advances in biolinguistics: The human language faculty and its biological basis*, 46–66. London and New York: Routledge.